
ある日の昼下がり

修難

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日の昼下がりに

【Nコード】

N3442G

【作者名】

修難

【あらすじ】

普通の学校に普通の日常を望む俺。だが、周囲が普通じゃない。即ち、普通の日常が特別となる。ならば、俺は自身の力で掴んでいくこととする。そんな物語である。らしい。

第1話：不安（前書き）

前書きがあつたから、せつかくなので一言だけ。
これを楽ししく読んでもらえたら嬉しいです。

第1話：不安

俺は走る。

あの真っ赤に燃えている太陽に向かって。

なーんて熱血バカな行動をするわけではないが、走っているのは事実。

今の時刻は遅刻ギリギリの瀬戸際。だから、走っている。

昨日の夜、ひさびさにギャルゲーをやっていたら熱中してしまい、そのまま無意識の内に就寝した。それで目覚ましをセットするのを忘れていたわけ。

走りながら俺は重たくなる瞼をこする。眠たい。

途中、石につまずきそうになる。寝不足だ。

今時、珍しいリリースントの髪を持つ不良共と遭遇する。おお、絶滅危惧種。

とりあえず、なんのものにも目もくれず走る。

だが、そんな時だった。

「オ〜〜ワタシヒトサガシヲシテイルモノデ〜ス。ソコノアナタ、ヒトサガシノキヨウリヨクオネガイシマ〜ス」

などと、作り物の鼻を付けた兄貴が寄ってきた。

とりあえず殴っておく。

「ぐぼツ……な、何故、お兄ちゃんを殴るんだい？我が弟よ」

「イキナリわけも分からん似非外国人に扮して、俺に近づこうとしたからだ」

「フツ、それは違つぞ」

怪しげに笑う兄貴に対して一步下がる。

こんな変人に見えるような人だが、れっきとした俺の従兄。

だが、従兄とは言え、関わりたくない奴だっているものだ。

例えば、目の前の見るからに変質者であるこの男には特にな。

つくづく思い知らされる。

過去の思い出が走馬灯のように駆けまわり、頷いた。

兄貴は高々と両手を広げ言う。まるで神に言うかのように。

「俺はただの男のお前には興味がない。俺が興味があるのは……」

一呼吸を入れて宣言する。

「シスコンだ！！！！　　つまり、お前の……………」

俺の引きつっていた顔がますます引きずる。

「妹の方に興味が！……………ぐはッ!？」

有無を言わず、もう一発殴る。

兄貴は思いつきり吹き飛び、ゴミの溜まり場に激突した。

そのまま兄貴は夢の中へと飛んだ。

「これだから兄貴とは関わりたくないんだよ……………ハア」

肩を落とし、溜息がこぼれる。

兄貴とは昔からの知り合いである。そして、俺の妹の舞とも知り合い。

その兄貴が特に舞にご執心なのである。理由は知らんが、ただ言い放っていることがある。それはさつきも言っていた通り、兄貴はシスコンらしい。

なのでいつ襲われかねん舞を、別ルートから行かせているのだ。兄貴には秘密のルートなのである。

だから、そのルートを知りたがって、いつもこうして俺が通るであろうこの道で待ち伏せしてはつかかって来ているのであった。

説明は以上。

俺は途方もないような道を走り続けた。

第1話：不安（後書き）

後書きもあつたので、次で書きます。

第2話：運命

走り続けて、十数分。

そんなこんなあったものの、その角を曲がれば学校までは一直線だ。

ふと、脳裏に昨日やったギャルゲーの初めの部分が甦る。

「ハアハアハア、クソッ。遅刻までギリギリじゃねえか」

学校までの道のりを、主人公が行きよいよよく走る。

その途中、角を曲がろうとした主人公。

だが、そこで誰かとぶつかってしまった。

主人公と誰かはしりもちをつき、主人公は打ちつけたところを摩りながらも直ぐに立ち上がる。

細目で開いた主人公は、相手も倒れたことを知り、思わず手を差し出した。

「悪い、ちょっと急いでいたんでな」

主人公は相手をよく見ている。少女だった。それもうちの学校の制服を着ている少女。

少女は俯きながらも差し出された手を見て、一瞬ビクツと震えた。

数秒間、様子を見た少女は差し出された手に、自分の手を伸ばす。そして、またビクツと震えた。

だが、俺は何の迷いもなく目の前にある手をにぎる。

「引つ張るぞ」

一声掛けて、少女は頷く。

主人公が立ち上がるように引つ張ると、思っていた以上に軽く、スツと立ち上がった。

手を離すと少女はパツパツと制服を調えた。

それから俺と向き合い、俯き加減であった少女は少し顔を上げる。

綺麗、或いは可愛いと言うべきであろう、そんな少女はそこにはいた。

主人公と目と目が合う。少女の顔は薄く朱に染まっていた。

また少女は恥ずかしそうに俯いた。

少し、拳動不審な少女はそっと口を開く。

「あ、あり、ありがと……ん、ありがとございます」

一瞬、時間が止まったような気がした。

そして、胸の中がザワツと騒ぐのを感じた。

後にそれが何を指しているのか、今は知らずに学園生活を送ろうとしていた。

といった具合のベタなシチュエーションが脳裏を横切る。

その時、俺は淡い期待をしてしまった。

角を曲がれば、恋が待っているのではないか。

現実では一切ありもしないこと。それを望んでしまったのだ。

足を一步、一步と踏みしめることで、角が迫ってくる。

もし、そこに恋が待っているのなら、俺はどんな人が良いだろう。

昨日のギャルゲーのような、少し人見知りのおとなしめの子か。

或いは、学校でまた再会して「お前は、朝ぶつかってきた男」などと言ってくるツンデレ？

そのどちらかが好みだ。

などと考えている内に、無意識に曲がってしまっていた。

妄想の中にいる俺は、現実が見えていなかったらしく、誰かぶつかってしまっ。

ぶつかった衝撃で、二人とも尻餅をつくように倒れる。

「イテテテ……げっ、しまった」

現実逃避しかけていた俺は、現実的な痛みですぐさま現実に戻り、倒れた相手を見る。

どこかの女子生徒だった。ショートカットのその少女は俯き、そのまま固まっている。

「あちゃ〜、本当に起こるとはな」

少し後悔するように、相手には聞こえない程度につぶやく。

そして、手を差し出した。

「ほら、掴まれ。遅刻すつぞ」

現実世界に戻った俺は遅刻というものを思い出した。

今日はヤバイ、特に今日だけは遅刻は出来ないのだ。それだけの理由はあるわけ。

俺がここにいるということは、この子もギリギリなのだろう。なんとなく思う。

少女は差し出した手を見る。

少し首を傾けた。フワリと髪が揺れる。

「今日は急がないとヤバイだろ？互いにな」

俺は少女の手を強引に手を取る。

少女はビクツと震えたようだが、それはお構いなしだ。

なんせマジで時間がギリギリなんだから。

「引っ張るぞ？」

少女は頷く。

加減は分からないが、手助け程度に引っ張ってやる。

そしたら勢いあまって今度はこちらの方に倒れる形となった。

俺は両肩を手で押さえるように支える。

その時、香水か何かは知らんが、どこか甘いにおいがした。

何故か胸が騒ぐ。

それから嫌な予感がした。

目の前にあるこれは何者だろうか？

心の疑問、本能が俺に告げる。

これは関わってはならない者。

「

「……………」

華奢な体つきの少女は、体に伴った声を発した。

小さくて聞こえなかったが、確かに聞こえた。

お礼を伝える言葉。

“ありがとう”と。

第2話・運命（後書き）

さてと、読んでくださってどうだったでしょうか？

まあ、そこら辺は評価していただいて、と。

次回は前書きを書きます。

第3話・呆気（前書き）

そういえば、風邪を引いています。

なのでオカシイ部分があるかも知れませんが、ご了承ください。
ああ。一応言っておきますが、言い訳ではありませんよ？

第3話：呆気

「フウ、なんとか間に合ったか」

俺は落ち着きを取り戻し、胸を撫で下ろした。

「お前、ほんとギリギリだったよな」

横から聞こえてくる声。

うん？と横を振り向く。

「よっ、久しぶりだな。三日ぶりか」

「……誰？お前？」

冷たい一言に傷つく水谷^{みずたに}。

「ガーン……って、嘘だろ？」

「ああ、冗談だ。谷水」

「ってか、間違ってるし。逆だ！逆！」

「逆？」

少し考えるように手を顎にやる。

数秒後、平手の上に握り拳を置くようなポーズをした。

「そうか」

「おっ？ やつと、思い出したか？」

「ああ、やつと分かったぞ。にたずみ」

「そっちの逆じゃねえ〜！〜！」

水谷は頭を抱えるようにくねくねと動く。

それが気持ち悪かったのか、四方八方から冷たい視線で見られ始める。

一旦、俺は他人のフリをした。

数分間それは続き、水谷自身もやつと状況を察したのか、小さく縮んだ。

それからそつと俺につぶやく。

「俺って浮いてた？」

「ああ、馬鹿みたいに浮いていたぞ。やったな」

俺は親指を立てる。

水谷は顔がこれ以上ない位に引きつっていた。

「多分、俺の学園生活がああ〜！〜！などと考えているのだろう。」

今は体育館の中にいる。ステージの上には“入学式”などと書かれた布が飾られていた。つまり、今日は俺達の入学式なのだ。

入学式当日に遅刻なんてしたら、色んな奴に目を付けかねんからな。

喧嘩は上等だが……いや、むしろ歓迎？でも、普通に学生生活を送りたいと思った。

この頃になって普通という日々が一番だと思ったわけ。普通＝平和だからな。これが俺にとっての方程式。

「そういえば、なんでいつものように、怜奈さんに起こしてもらわなかったんだよ？俺なら大歓迎なんだけどな。」

絶望していた水谷が正常に戻り、普通に話しかけてくる。

切り替えが早い奴は良いよな。いや、コイツの場合は単なる馬鹿か？

「ん？今、俺を馬鹿にしてなかったか？」

「イヤ、シテムセンケド？」

だが、馬鹿は馬鹿でも野生の勘だけはあろうようだ。

「怜奈姉さんね……あん人苦手だわ、俺」

「そうか？ただお前のことが好きなんじゃね？だから、あんだけべ

タバタとくっ付いてくるんだろ？」

そうなのだ。白石^{しらいし}怜奈^{れいな}さんは事実上ブラコン。何故か標的が俺だけという最悪な状態にある。

だが、シスコンである兄貴のような自称はしていないものの、明らかにブラコンというのは目に見えている。

別に俺は怜奈姉さんを嫌いというわけじゃない。むしろ従姉としては好きだ。

でも、それ以上の感情がない。ハア、いい加減にしてほしいものだ。怜奈姉さんにも。

怜奈姉さんのことを考えると頭が痛くなってくる。

頭を横に振り、別のことを考えた。

ふと、さっきのことが甦る。あの少女のこと。

あれから少女はお礼を言って、すぐさま走って行ってしまった。

ぶつかったのは明らかに俺の不注意だ。

だから実際は、お礼を言われることなんて何もしないというのに。

ハア、複雑だ。

俺が色んなことで苦悩していると、やっと長々と校長の話しが終わった。

かれこれ三十分だったか。長いにも程がある。

そして、最後に生徒会長の一言

！？

忘れていた。この学校の生徒会長と副会長を。

そういえばこの人達だったな。怜奈姉さんに兄貴。

ステージ上を優雅に、そして、堂々と歩く姿は誰もが見とれる。
容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群。それが怜奈姉さん。

その後ろにはメガネを掛け、自信に溢れている顔を持ち、黙っていればモテそうな男。それが兄貴。

この二人が生徒会を纏めているらしい。それもまだ二年であるこの人達。そこがまた凄い。

だが、こんな二人にも弱点というものが存在する。

それは俺と舞である。

怜奈姉さんは俺の前では、擦り寄ってくるように甘えてくる。それを引きは離そうと俺は大変だ。

兄貴は舞の前では、鼻の下を伸ばし危ない目付きで見ってくる。

舞自身が気付いているかは別として、俺がいつも殴っては蹴り飛ばしている。舞は世間で言う天然であるから、危なっかしい所が多すぎだ。

だが、それを取ってしまえば完璧といっても過言ではない。

それほどまでに優秀だというのに……ハア、人生を棒に振っているようなものだ。

怜奈姉さんがマイクの前に立ち止まった。その後ろには兄貴が控えるように立つ。

そして、そつと口を開く。

「私がこの学校の生徒会長、白石怜奈です」

シーンと静まり返った体育館に響く。

一見、大人の女性らしい落ち着いた口調だが、どこかしら威厳に満ちていた。

「今年、入学した方々、おめでとう。私はHG……もとい、校長のようになんと話す気はさらさらありません」

HG？ふと、口からこぼれた言葉に疑問を持つ。

だが、そんな些細なことは俺しか注目していなかっただろう。

何故ならここにいる全ての人が、怜奈姉さんの美しくも鋭い眼光にやられていたのだから。

それは俺の友人である（？）水谷や先生方も例外ではなかった。

「私が言いたいのはまだ一つ」

怜奈姉さんが一息吐き、静かに目をつぶる。

体育館にとめどない緊張がはしる。

そして、ゆっくりと目を見開いた怜奈姉さんは、こう宣言した。

「この私が生徒会長である限り、普通の学生生活が送れないことを了承していただく」

体育館に緊張していた空気が一転、はあ？というハトが豆鉄砲を食らったかのような顔を誰もがした。

まあ、俺はというと怜奈姉さんらしいなく、なんて思っていた。

「いや、決めるもなにも、私に従うしか選択権しか残ってない。だから、ここでは私が絶対ということ、よ・ろ・し・く」

言いたいことだけ言って、怜奈姉さんはステージ上を後にした。

最後に残ったものと言えば、男女生徒先生問わず、怜奈姉さんの最後の色目にやられていた者達の末路だけだった。

俺は溜息を吐いた。

「大丈夫か？この学校？」

怜奈姉さん一人でこの有様の生徒先生を、どこか哀れむように見る俺。

だが、よく見渡すと怜奈姉さんの色目にも負けていない奴らも
少なくは無かった。

思っていたより、普通の奴もいるのか。少し安心する。

ステージ上を見た。兄貴と目が合う。

兄貴は“呆れた”という風に首を振っていた。

そこで俺はふと思う。

案外、怜奈姉さんと兄貴

あんまし変わらんぞ？

第3話・呆気（後書き）

本当は書く気はなかったんですが、一言だけ。

HGってのはここだけの話し“ハゲ”っての略です。

まあ、分かりきってますがね。

第4話・良友（前書き）

引き続き、風邪を引いています。
文章はご勘弁を。

第4話：良友

キーンコーンカーンコーン、チャイムが鳴る。

もうすぐHRの始まりを知らせるチャイムだろう。

俺もとうとうここまで来たか。遅かったようであつた。

昔を懐かしむ。

「……ねえ、聞いているの！？クロト！！」

「うおッ!?!」

すぐ耳元で聞こえる声にビククリする。

「おお、聞いているぞ。テルミット反応つてのは危ないから気をつけろ、って奴だろ?」

「違うわよ!!私が話していたのはTERUMIYAって店の、ス
イツの話でしょ!!」

怒ってくる同じクラスの女子生徒、すず鈴原亜美。

「まあまあ、落ち着いて亜美ちゃん。ここは話し合いで……」

「……ッ!?!」

「は、はううううう」

どうにか穩便に済ませようとして入ってきたもう一人のお淑やかな女子生徒、山本麻里。

だが、亜美にひと睨みされてしぼんだ。

「オイオイ、麻里ちゃんに当たっても可愛そうだろう?」

この場を収めようと水谷が入ってくる。

「うっさいわ!!このナナシやろっ!!」

「はっ、傷跡をえぐるような言葉を……だ、だが、俺にもちゃんと水た……」

自分の名前を言おうとすると、水谷にさらにもう一言。

「お前なんてね、名前いじられ役しかないんだから、どっかで勝手にくたばるときなさい!!」

「う、うあああああああ!!それ以上聞きたくなああああいいいい!!……」

止めの一言が効いたのか、アホ面丸出しで教室から出て行った。

もうすぐHRだったよな?

「で、そのテルミットヤがどうした?」

「TE!RU!MI!YA!!」

「ああ、テルミヤな」

これ以上ない位に睨みつけてきた亜美に、これ以上ない位引きつった顔で俺は言った。

亜美は肩を落とし「まあ、良いわ」などと言ってくる。

何故、上から目線なのが気になるが、これ以上聞くとさすがにヤバイので、なんとか飲み込む。

「それでさっきの話しなんだけど」

亜美から今日の帰りに、俺と亜美と麻里、あとお情けで水谷の四人で、そのTERUMIYAという店に行かないか？という誘いを受けた。

俺は正直どつちでも良いのだが（多分、飛んで喜ぶように「行く絶対に行く」などと言ってくる水谷とは違って）、今は金欠だ。

つい最近、入ったバイト代も、ある理由で無くなった。

「それなら俺はパスだな」

二人の顔の表情が曇った。

うっ、何故か罪悪感を感じる。

この頃、色々な金銭関係で付き合いが悪いせいだろうか？だが、それでも行きたい時も行けないのが貧乏人の辛い所だ。

しかし、ここでは友人をとっておくか、それとも金か？

俺の理性と欲望が戦う。

(オイオイ、別に良いじゃねえか？)

悪魔が俺に語りかける。

(金ってモンは使う為にあるんだろ？なら今使え。今、使わなければいつ使う？)

俺の中で欲望の存在がでかくなる。

だが、ここで天使が反論してくる。

(いえいえ、ここは金を大事にしなければなりません)

天使は理性なのでまともなことを言う。

(金は使う為にあります、貯めることも必要です)

まあ、必要と言っちゃあ必要だな。

(ああ？ぬりいこと言ってんじゃねえよ。この真面目君がよ！)

欲望が理性を上回るほど、存在が大きくなってくる。

ぐっ、少し欲望が有利か？

いや、ここで理性は逆転の必殺技を出してくる。

「そういえば」

麻里が不意に口にする。

「ナナシ君が今回は俺の奢りだって言ってたよ？」

「ああ、そうだった。今日ヒマだったんだよね。だから、俺も行くぞ」

ワザとらしく言う俺を見て、彼女達はお互いに親指を立てていたのは気にせずにおこう。

でも、感謝だな。良き友人に。

亜美に麻里、そして……………あれ？アイツ、名前なんだっけ？

ああ、そうか。ナナシだったな。

第4話：良友（後書き）

第4話にして、やっと主人公の名前が登場です。
まあ、呼び名なんで本名ではないんですけどね。

第5話：学食

キンコーンカーンコーン、昼休みの鐘が鳴る。

机に突っ伏していた顔をそれと同時に顔上げる俺。

「起立」

学級委員が号令を掛ける。

「礼」

一同が頭を下げて、次に上げる瞬間、それは起こった。

そう暴動だ。

「…………い、今、なんて？」

「いや、だからね。もう全部、売り切れちゃって何も残ってないのよ。ほんとゴメンね」

学食のおばちゃんは俺の横を通り過ぎる。

俺はその場に立ち尽くした。さっきまでパンを売っていたであろう目の前に。

そしてもう一人、俺と惨劇を受けた奴がいた。

み…ず…いや、思い出すのが面倒だし、ナナシでいいか。

そう、名が無しと書いてナナシもまた、唇抜きとなったのだった。

ナナシは足から崩れ、膝がつくように倒れており、少し痙攣していた。

俺はというと顔が今日一番に引きつっていた。

「マ、マジっすか？」

あれは数分前のこと。

起立、礼が終わった瞬間を見計らっていたのか、教室のほぼ全員の男子は急にどこかへ走り去った。

男子だけで残されていたのは、俺とナナシとこの教室の一番の常識人(?)である藤宮。

俺は藤宮に近寄る。

どうやら雑誌を見ているようだ。表紙にバイクなどが書いてある。中身もそれ関係でいっぱいだ。だが、どうも俺は興味が無い。

将来、車かバイクを買おうとは思うが、あんまり詳しくは無かった。

俺が興味で雑誌を見ている視線を感じたのか、藤宮が気付いた。

「興味があるのか？クロトも」

「ん？ああ、いや、違うんだ。ちょっと、聞きたいことがあってな」

雑誌に落としていた顔がこちらを見ている。

クールというべきなのか、無愛想なのかは定かではないが、あまり表情が顔に出ないタイプだ。

顔は悪くない。女子にモテそうなタイプというべきだろうか？まあ、そんな所。だが、顔が無愛想だからと決して悪い奴でもない。男子にも女子にも結構人気があつて、気軽に話せるタイプでもある。

「さつき物凄い形相で出て行った男子のことなんだけど」

一瞬、固まり「ああ、アレか」と納得した藤宮は少し引きつった顔で言った。

「あれはな、簡単に言つと学食に行つたんだ」

「学食に?」

「ああ」

学食といえば、あのパンやら何やらが売っている場所だよな。

だが、あんなに急いで行く程か?普通はもっと歩いていくだろ。

まあ、小走りぐらいならするかも知れないが、あそこまでは……な
あ?さすがに引くぞ?

「何故に学食に?」

どっからか出した紙容器の飲み物の物にストローを挿した藤宮は言
った。

「一瞬で無くなるらしいぞ」

「…一瞬って、パンとか弁当やらその他もろもろのことか?」

ストローを啜えた藤宮が「ああ」と答えた。

俺は「そんな、バカなあ」と笑っていた。

そして、現状に至るわけだ。

「ってか、納得いかねええええ!!」

普通はありえねえ状況だぞ？

さっき、そこら辺にいる転がっている戦争の産物に聞いてみたが、今回は五分で完売。いや、五分も経たずに完売したらしい。

チャイムが鳴って五分後には完売、ということか。

何たる失態だ。この俺がまさかの昼抜きになるとは……………シヨック。

これでも欠かさず朝、昼、夜。三食を楽しみに生きてきたというのに。最悪だ。

これでは、これまで積み上げてきた記録があああああああ!!

立ち尽くしたまま、頭を片手で抑えたままの状態になった。

これで俺もまた戦争の産物となったことを認めたことになる。

これまた顔が引きつる。

一瞬、知り合いから分けて貰おうか？などと考えてみたが、仕方なく断念した。

つまり、まともな奴がないわけ。

亜美はその性格だからくれないだろうが、麻里はその性格からいくと貰えるかもしれない。

だが、問題がある。麻里は超が付くほどの甘党だ。なので、麻里の弁当は甘くなっている。魚も肉も野菜も、勿論のことご飯さえも甘くしてしまっている。全て砂糖を加えて調理しているらしいが、聞いただけで少し気分が……。

だが、俺は直ぐにこんなことをしている場合じゃないと気が付き、他の友人に頼もうと思ったが結果は見えているので諦めた。

「こんなことなら、朝、コンビニでも寄っとけば良かったな」

肩を落として深い溜息を吐いた。

「ハア」

そんな時だった。俺に天使が微笑んだのは。

「あの〜すいません」

女の子らしい可愛い声を出して、誰かが俺に声を掛けてきた。

戦争の産物となった俺は、気の無い返事をしてそっちを向いた。

そこには俺と同年代の子がいた。

「もし、ご迷惑でなければ、一緒に……」

俺は一瞬、違和感を覚えた。

だが、その可愛らしい女の子に違和感があったのでない。もっと他の恐ろしい者達に……………。

「ほうほう、クロトよ。友人を差し置いて、一人だけ女の子の弁当かい？ええ！？」

俺はその違和感がようやく分かり、後ろを振り向く。

ほぼ学食の奴らがこちらを見て、殺意に近いものが確実にこちらに向けられていた。

さっきまで倒れていた屍ものそのそと立ち上がり、その先頭にはナナシがいた。

「誰が友人だ。それにここにいるお前ら、何をそんなに殺意むき出してんだ？」

「そんなの決まっているだろ」

ナナシが代表として喋る。

「それは」

『それは』

ナナシの言葉を繰り返す一同。そして、静かに震えだす。

さすがに一々、相手するのが面倒臭くなってきた俺は、さっきの女の子の手を引いて連れ出す。

運良くバレなかったようだ。

バカー同は揺るえながら下向いていたからな、何か叫ぼうとしていたのだろう。

俺が女の子を連れ出して、十数秒後『お前が！！！っっていないのかよ！！！』と聞こえてきた。

凄いな。まさか、そこまで揃うとは合唱団の皆さんもさぞビックリされているだろう。

それに突っ込みまで息ピッタリとはどういうことだ？

アレは……………さすがに練習してんだろうな。

ふと、逃げながらもそんなことを思い、苦笑いを浮かべたのだった。

第5話・学食（後書き）

毎日、書くのは少し辛いので気が向いたら書くことにします。
来訪者さん達は気軽に読みに来てくださいな。
待ってますよ……フフフフ。

第6話：屋上

風が心地よく髪をなでた。その度に静かに揺れる。気持ちが良い。鉄柵に背を預けながら空を仰ぐ。真っ青な空だった。

「あ、あの〜」

「ん？ああ、ごめんごめん。で、なんだっけ？」

仰いでいた顔を少女に向ける。

少女は俺の横に座っていた。

「さっきは邪魔が入ったんで、ちゃんと言えなかったんですが」

近くに置いてあった物を手に取り、真っ赤な顔で差し出してきた。

「わわわ、私と一緒に、お、お弁当を食べてくれませんか！！？？」

俺は弁当をまじまじと見る。

「……迷惑だったでしょうか？」

「……いや、助かったよ。」

「え？」

俺は胸を撫で下ろし、ボソツと呟く。少女が訳が分からず首を傾

げる。

「ああ、今のはこっちの話。ありがとう、有り難くもらっよ」

「ほ、本当ですか!」

「ああ」

少女は満面の笑みで、差し出してきた弁当を両手で渡す。

俺は弁当を受け取る。弁当は四角い形をした容器に入っており、周りを青色の布で綺麗に包まれていた。布をほどき中身を見ってみる。シンプルな弁当ようだった。

肉に魚やサラダ、タコさんウィンナーにりんごのうさぎもある。

最初の部分なら問題はないが、最後のほうがちよっと。

弁当の定番といえは定番なんだろうが、少々、恥ずかしい。実際、食べるとなると躊躇してしまう。

弁当の可愛い系部門のおかずを食べようか食べまいか葛藤する。

まあ、ここは食わないという選択肢は本当の所ないのだが、やっぱり羞恥する。自分のプライドが邪魔をしていた。

「どっしました?」

少女が一向に手を付けようとしない弁当を見てたずねる。

思わず震えていた箸を置いた。

「え？ま、まさか、お気に召しませんでしたか？」

「いや、そういう訳じゃないんだけど……ちょっとね」

苦笑いを浮かべた。

だが、苦笑いの方向には弁当がある。少女から見たら、誤解を招かざる負えない。

途端に少女は顔を暗くし、落ち込む。

「そうですね、ハア。すみません、私が食べたくも無い弁当を無理やりに……」

「いや、本当に食べたくない訳じゃないんだって」

少女の言葉を遮り、俺は弁解をするが通用しない。

つまり、俺に残された道は唯一つ。このタコさんとうさぎを食べなければならぬ。

まさか俺が、こんな愛らしい二匹に躊躇するとは、中学校の頃の俺は考えも付かなかっただろう。

だが、それは過去の話にしか過ぎなかった。俺は今を生きている。普通の日常を生きようとしているのだ。

まさに、これは試練といっても過言ではないのだろう。普通の日

常を手にする最初の試練。

タコさんウィンナーにりんごのうさぎ。

俺は意を決し、箸を手にする。

そして、先ほどまでの震えはどこにもなく、しっかりと箸を手
固定していた。

箸先はタコさんウィンナーの場所へ運び、落とさぬようにしっ
かりと掴む。それからゆっくりと持ち上げた。

宙に浮いたタコさんウィンナーを口元へと運ぶ。

一瞬、箸はすぐ近くの口元で止まる。

だが、次の瞬間、開け放たれた口に入れ噛んだ。カリッと良いと
音を立てた。

口の中でモグモグと食べているのを機に、次々と弁当の中身を平
らげていく。

それを見た少女は笑顔を取り戻し、静かに笑った。

そして、最後にりんごのうさぎが残る。これが始まりの最後の試
練。

箸を器用に扱い、りんごのうさぎを取る。

俺にはもう迷いなどなかった。勿論、後悔もない。自分のプライ

ドも捨ててまで、この子の笑顔を取った。それだけだった。

だけど俺は、ただ単に誰かが笑う顔が好きだったのかも知れない。だから、落ち込む顔を見て弁当を食う決心を固めた。

だが、今となってはもうどうでも良いことになっていた。

何故なら俺は

。

「ふう、食った食った。ありがとうな、お世辞抜きでうまかったぞ」

空っぽになった弁当を不器用ながらも包み、少女に感謝も込めて返した。

「いえ、美味しかったんなら良かったです」

笑顔で弁当を受け取る少女。

こんな天使みたいな子がウチの学校はにいたんだな〜と思うが、
一つ疑問が浮かぶ。

だけど、アレ？なんでこんな子が、俺なんかには弁当を食わせるの
だろうか？ふと、そんなことを思う。

だが、腹いっぱいになった満足感で、別に良いや〜などと一蹴りで終わった。

何故なら俺は弁当が美味しかったので万事OKだったのである。

「ああ、そういうえば名前とか聞いてなかったな」

空を仰ぎながら聞く。雲がゆっくりと流れていた。

「あ！そうでした。すっかり忘れていました」

あちゃ〜と少女は苦笑いを浮かべた。

少女はスツと軽く立ち上がると、俺の前に立ち、クルリと体をこちらに向ける。

「初めまして。私、あなたと同じクラスの平宮実玖ひらみやみくって言います。今後ともよろしくお願いします。クロトさん」

同じクラスメートらしい平宮実玖に深々と頭を下げられる。

マジでか？同年代とは分かっていたが、クラスまで同じだったとは、全然気付かなかった。

まあ、今日が初日だしな。しょうがないだろう。

自己暗示を掛けた。

上を見上げれば空、周りを見渡すと家々が立ち並ぶのが一望できる。俺と平宮実玖は屋上にいた。

俺達が来たのはついさっき。

それまでは、ここは不良共の集まりだった。

だが、俺達の姿を確認するな否や、ガラにも合わず女性の悲鳴に近いものを発した不良共。それで四方に散らばり震えていた。

俺達は誰もいない場所に足を運ばせ、そこに座る。

刹那、猛獣に追われた小動物が逃げるが如く不良共は逃げ出した。それも死に物狂いでだ。

まあ、静かになったので別に良いが………無性にやりきれない気持ちだった。

俺がここを選んだ理由は特別にない。

単に風に当たりたかった、それだけだった。

だが、それは正解だったようだ。

風は心地よく、俺と平宮実玖以外はいないこの静かな空間。何より美味しかった弁当。

そして、その弁当の中身を食す場面を見られなかったこと。

色々な意味で良かった。

俺は空を眺めながら、ふと疑問を感じる。

こうやって普通の日常を送るのが幸福か、或いは変化し続ける日常が幸福なのか。

今の俺は知るはずも無く、ただ今を幸福として過ごしていた

第6話：屋上（後書き）

まだ風邪気味です。

全く、しつこい病原菌です。

第7話：夕空（前書き）

気付いたら、時間が経っていた。

これは宇宙外生命体の仕業に違いない。
そう思いたい作者であった。

第7話：夕空

真つ暗な道に俺はいた。

歩こうともせず、かといって退くこともない。単に突っ立ってるだけ。

静かに道を眺める。

下から前方に続く道を順次に見てみると、前方の少し先のほうで道が途切れていた。

そして、奥には闇しか見えない。真つ黒な闇だ。

何もかも飲み込むような、そうブラックホールとも言おうか。

それに近いものがそこにはあった。

後方を振り返る。一本道が続いていた。なんの歪みも見られない。

目を細め、軽く唇を噛む。口の端からは赤く染まった液体が流れた。

俺はまた前方を向く。

一步、前へ進む。

そして、一步、一步、鉛のような足を進め始めた。

だが、幾度となく歩き続けても、道が途切れる所にはたどり着けなかった。

近づくことさえも出来ていないようだ。

諦めて足をまた止める。

前方に見える闇を見た。

近いように見えて実際は遠くにあるそれ。

目に物体のような形は見られない。

ただ、そこにあるものを俺は知っていた。

それは
。

頭に強い衝撃を受けた。

ゆっくりと目を開ける。誰かの顔がアップで表示された。

「っおッー!..?」

一気に目を見開く。

瞬間、もたれていた鉄柵に頭をぶつけた。

「……………う…痛え」

俺は頭を摩りながら今の状況を確かめようと、周囲を見る。

学校の屋上にいるのが分かる。

寝ぼけている頭がぼんやりと働き出す。

平宮実玖の弁当を食べた俺は、満腹感に酔いしれていた。

そして、うとうととしていたのを覚えている。

その後、俺は眠ったのだろう。

簡単な仮説を立てる。

「それにしても」

今も尚、顔を下げようともしない少女Aを見た。

顔が目の前にある。

それに近すぎてイマイチ顔の表所が読み取れない。

「誰だ、お前？というより以前に、下がってくれ。顔が近すぎてまともに話せん」

「おっと、これは失礼。君の寝顔がつい可愛くてね」
後方に飛ぶように離れる。

「よっと」

着地と同時に、フワリとスカートが揺れる。

「私は一年C組の小野田真^{おのだまこと}。言っておくけど男じゃないよ？見た目通り、れっきとした女の子だから。よろしく」

ニツコリと笑いエツヘンと胸を張る。

いや、そんな自信満々に胸を張られてもな。

一年C組、それは亜美と麻里、そして、平宮実玖と同じクラス。

つまり、俺もまた一年C組だったりするわけだが。

「じゃあ、小野田。俺に何用だ？」

そうなのだ。俺はコイツを知らない。なので相手も同じに違いなのだ。

だが、初対面の奴が目の前に、それも俺の寝顔を見ていた。

俺に何かがあった、と考える普通の反応だな。

「用？……別にこれといってないけど？」

……さいですか。

「それと私は苗字じゃなくて名前で呼んでいいから」

「じゃあ、何で起こしたんだ？真」

「起こした……ああ、起こしたのは私じゃないよ。君を起こしたのはアレ。それともう一つ真つてのは止めて欲しいな。あだ名で呼んで」

一々、注文の多い小野田真がひとさし指で何かを指す。

ボールだった。ソフトで使うボール。それが屋上に落ちていた。

俺は片手を地面について立ち上がり、まだ痛む頭を抑えながらボールに近づく。

落ちていたボールを軽く持ち上げる。やはり、ただのボールだった。

ボールをお手玉のように扱い、聞いてみる。

「これが俺に？」

「そう。まずボールがカキンって打たれて、屋上にヒューってやってきて、君にドガンとぶつかって、そんでコロコロと転がった」

微妙な擬音と体でボールを表現する。

これがまた微妙な出来なので俺は苦笑いを浮かべた。

「で、それで俺は起きたのか……マコ」

「うん、そうだけど……マコは気に入らない」

起きた理由は分かった。だが、今度は何故コイツが目の前にいたのかが気がかりだ。

「じゃあ、何で意味も無く俺の顔を眺めていたんだ？」

「可愛かった、から？」

ニツコリと笑うマコというあだ名が嫌な真。

即答か。

「それと、たまに言う寝言が可愛さを何倍にして……」

「ストツウウウウプツ」

さっきの俺の寝顔を思い出す真に、すぐさま止めに掛かる。

何故か、口の端から涎のようなものが見え、ありもしない妄想を見ているかのようだった。

これを野放しにしていると、何を言うか分からない。

まあ、現状を整理するか。

寝顔を見ていて、顔の表情、寝言さえも知っている真。

そこから見て、そんな数秒ってトコじゃないだろう。

だから、もっと見ていたに違いわけで。少し羞恥が湧く。

自分の顔が少し引きつるのを隠すように、ボールが飛んできたであらうグラウンドを見る。

色々な部活が目に入る。陸上にソフトボール。他にサッカーやその他のもろもろ。

俺はこういうものを見ると柄にもなく「青春してるな」など思ってしまう。

心はオジサンなのだろうか？ふと自分が思ったことに傷つく。

「ん？今って何時だ？」

グラウンドよりも遠く、水平線に太陽が沈み掛けていることに気付く。

空は夕暮れに染まっていた。

「エッ？えっと、五時過ぎだったかな？」

「……………マジか？マコット」

「マジだよ……………あと、マスコットみたいで、それヤダ」

うーん、帰宅部として有り得ない時間帯にいるな、俺。

それ以前に、夕方じゃねえか。

さっきまで青空が広がる昼だったというのに、時間を無駄にしたな、俺。

確か、今日は昼を食べたら下校になっていたので、授業とかは大丈夫のはずだ。

まあ、別に良いか。暇だしな。

何かが吹っ切れ、鉄柵に体を預けるようにして、外の風景を眺める。

この頃、風景らしい風景を見ていなかった気がする。

何故なら、目の前にこんなにも綺麗だということに、今まで見たことがなかったからだ。

目のちょうど良い抱擁になる。口が思わず綻びた

「綺麗だな、シン」

「まあね。私、芸術とかそういうもんには疎いけど分かる気がするよ。クロト」

どうやらシンというあだ名を気に入ったらしい小野田真は、俺と同じような形で隣にいた。

二人で静かに眺める。

だが、その静かさをブチ壊す音が屋上に鳴り響く。屋上に行く扉が開いた音のようだ。

俺達二人は屋上の扉を見る。一人、そこにはソフトのユニフォームを着た女子生徒がいた。

急いで走ってきたのか、息が上がっていた。

一旦、その女子生徒は周囲を見る。

ここには俺達しかいなかった為か、こちらに向かって走ってきた。

「えっと、君！ここにボールが飛んでこなかった！？」

俺に向かって喋りかける。

一度、思考を巡らせた後、自分の手を見る。手にはボールが握られていた。

今の今まで存在を忘れていた俺は本当にオジサンになってしまったのだろうか？と本気で心配した。

俺達の前まで走ってきた女子生徒はハアハアと息を切らせ、前かがみになって膝に手をついた。

「ボールってこれのことか？」

ボールを差し出す。

今更、俺とコイツは同じクラスメイトだった、などというオチを聞き飽きた俺は、リアクションは止めて普通に名前を聞いた。

「私？私がかぐや。緑川みどりかわかぐや」

初耳だったが、ここは驚かずに反応しよう。

「おう、そうだったな。かぐ………」

「かぐやだったのか、初耳だな」

「まあ、声に出して名前言ってないからね」

「……そうだったな」

俺が返事しようとしたがシンが横から入り込んできた。

そのお陰で知ったかぶりは避けられたようだ。多分。

シンとかぐやはまるで知り合いかのような口調で喋る。

まあ、二人は同じクラスメイトなので何ら不思議はないが、名前を知ってなかったぞ？

だがしかし、全くの他人というわけでもないの、顔見知りといった所だろうか？

二人の話題について行けない俺は、もうすぐ沈む太陽を眺める。

ひっそりと日の光は、
屋上にいる俺達を時間の限り、
照らし続けていた。

ちとど、帰るかな。

第7話：夕空（後書き）

不定期ですが、今後とも読んでもらったら嬉しいです。
では、また会いましょう。

第8話・再会（前書き）

途中からしゃっくりが止まらなくなった。
だが、ふと気が付くと止まっている。
なんともミステリーな出来事だった。

第8話：再会

鞆を肩に掛けるように持ち、後ろを振り返る。

今もなお、夕日に照らされている校舎が目映る。

「ここで…あと三年か」

どこか意味深に口に出すクロト。

その言葉の奥にどんな真意があるのか、私には分からない。

他人だから、と言えばそうなのだが、私が、そうだ、と決定付けたくないのだ。

頭で理解したいと思えど、理解はできない。

だが、それ以前に自分のことは自分でしか分からない。

そんな当たり前のことを私は自分自身に再確認させられた。

「憂鬱だな……………」

クロトは苦笑いを浮かべながらも、どこかこの先。

そう、何かが待ち構えているであろう未来を楽しみにしているようにも見えた。

私はそっと電柱から顔を覗かせている。

別に恥ずかしがり屋なわけではない。

かといって、あの人を眺めているだけで私は十分、などという恋焦がれている可憐な少女でもない。

ただの可憐な少女である。

そこは否定しない。何故なら真実なのだから。

今も尚、校舎を眺めていたクロトは、ゆっくりと歩き出した。どうやら帰るようだ。

用心に用心を重ねて尾行を開始する。

クロトを眺めながら、私は静かに微笑んだ。

「さて、どうしたものか」

誰にも聞かれない程度に呟く。

俺が校門を後にしてから数分が過ぎていた。

最初っから……いや、途中から突き刺すような視線を感じた。

中学の頃、俺はよく狙われていたので、誰かが見ている、という行為には敏感に反応することが出来た。

なので、今回も似たようなものだ。

ただ、違うのが一点だけ。

向けられている視線が微妙に違うということだけだった。

何か殺意のようなものではなく、ただならぬ興味を抱いているよ
うな。

言わば、子供が玩具を見つけた、そんな興味本位の視線。

初めてその視線を感じたのは、校門で立ち止まり校舎を見ていた
時だった。

威圧されるような視線を俺は感じた。

さり気なく帰り際に視線を感じた方向を見る。

それと同時に電柱に隠れる人陰を見た。多分、女の子だろう。

隠れた時にスカートらしき物が目に入った。

まあ、これで男だった時はこの上なく気持ち悪いが……………。

そして、数分が経過し、今に当たる訳だ。

女の子のストーカー行為はまだ続いていた。

そろそろ本気で逃げた方が良さだろうか。

それとも正体を突き止めて、詳しく説明してもらおうか。

二択で迷う。

だが、この視線……前にも感じたことがあったような気がする。

前といつてもつい最近……例えば、今日の朝とかに。

「……………あッ」

俺には一つ心当たりがあった。

あまり思い出したくない心当たり、それは。

「まさか……………お前」

顔が引きつりながら振り向く。

サッと電柱に隠れる影。

だがそれは、残念な形となっていた。

今回の電柱は隠れるには細すぎたようで、体の中央だけを隠し左
右はバツチリ見えていた。

「いや、隠れてねえから」

咄嗟に突っ込む。

「……………私は電柱、道路の脇に立ち並ぶ何本もの電柱。だから、そつととして」

「ああ、悪い悪い。この頃、ポケてきてて。じゃあ、またな……………つて、できるかああああああ！」

思わずノリツッコミをかます。

「……………やっぱ、無理か。残念」

さすがに諦めたのか、電柱から完全に姿を現した。

やはり女の子だった。

そして、今日の朝のあの子でもあった。

「まさかとは思っていたが、お前……………朝の奴か」

「朝の奴？私にはなんのことやら、さっぱり」

両手を広げ、やれやれと言わんばかりの仕草をするコイツ。

「本当にポケてきてんじやないの？」

「……………惚ける気か？」

「惚けるも何も、私、分かんない」

可愛げに首を傾げる確信犯。ちゃっかり、エヘツと笑いも入れる。絶対にワザとやってるぞ、アレ。

そもそも、可愛い仕草をしている所から有り得ん。

普通に考えて、そんな奴がこの世に存在している訳がない。

いるとしたなら、そいつは策士だ。俺はそう思う。

現実とはそんなに甘くないのだ。

それが現実という所、俺達が生きていくこの世界の真理。

「……まあ、別にそんなこと、どうでも良いがな」

ハア、と溜息を吐く。

「それよりもなんでまた、貧乏人であるこの俺をストーカーしてたんだ？……えつーと、名前は？」

「ストーカーは興味程度かな。名前は………**国家機密**」

「ほうほう、コッカー・キミーツと言うのか。じゃあ、キミーツで良いか？」

「……………バカ？」

「いや、ボケだから突っ込めよ」

「私、ボケ担当」

「知るか」

なんとなく流れに身を任せた話をした。結果、趣旨がズレる。

ハッと俺はそのことに気付き、自身の髪をグチャグチャにする。

「いやいや、違つぞ」

「いやいや。だから、私はボケ担当だってば」

「違つわー！俺が言っただけのは、なんで世間話をしているのかってトコだ」

一瞬、固まるキミーツ（一応、命名）。だが、すぐに動き出す。

「突っ込み所が違くない？もつと前の方からだとは思っけど………」

「ほつとけ」

故意にストーカーという部分に突っ込みを入れなかった俺は、また溜息を吐いた。

「ハア」

「アンタが溜息するとスッキリ。でも、その溜息聞いて、私ガツクリ」

俺は肩を落として、何故かキミーツもまた肩を落とす。

意味が分からん。

なんだ？俺をバカにしてんのか？

一応、頭をぶっしておく。

「イタツ！……イタイ…何故、私をぶっつんだ？」

少し涙ぐむキミーツ。ぶたれた部分を手で摩る。

しかし、そこはあえて何も言わず立ち去ろうとした。

「ちょっと、待てッ！！」

キミーツが声を掛けてくるが無視する。

だが、それでもしつこくガミガミと煩い。もう一回、ぶつか？

ふと、そんな考えも出たが、面倒くさくなった俺はあることを思いついた。

成功は低確率だが、相手に精神的ダメージは与えられる。

俺はキミーツに向き直り、人差し指で宙を指した。

たまに見るベタな奴だ。

「オイ！あそこにUFOが……………」

「未確認飛行物体、英語ならアナイデンティファイド・フライング・オブジェクト、その頭文字をとりUFO。で、本当にいるかいのかと世間が賛否両論で争われているそのUFOが、どうかしたのかな？かな？」

「い、いや、だからあそこに……………」

「こんな一般の町、それもどこにでもありそうな道路を歩いている私達がUFOを見る訳がないよね」

「あ、いや、あそこ……………」

「もしも、もしもだけど、UFOらしき物体を見たとする。だが、それをどうやって説明する？どっかに証拠があるの？あるなら見せて、ここにUFOがいました、と証明できれば良いんだけど。それで何かな？」

「いえ、なんでもありません」

あからさまに怪しい笑みを浮かべたキミーツが、フフフと不気味な笑い声をし、嫌味として聞いてくる。

絶対に仕返しのもりだろう。

クツ、詳しく説明が入ったUFOがどうかしたか、などと聞かれない訳がないだろ。

あそこにUFOがいる、などと馬鹿げたことを。

完全敗北をきした俺は苦し紛れにハハハと苦笑いする。

キミーツはというとハハハと楽しく笑っていた。

もう一回ぶっ。

「イツ!?……タ。なんで、またぶっ?」

再び涙目になったキミーツを見て、いい気味と満足げに笑った。

「フウ、さてと。今から帰るが、まだお前はストーカーを続けるのか?俺は別にどっちでも良いが、早く帰らんと親が心配すんだろ?」

俺はキミーツに聞いてみる。

口を尖らせてしよげていたキミーツは顔を上げる。

目が点になっていた。

ん?俺、今変なこと言ったっけ?

自分の頭の中がはてなで支配されていき、首を傾げた。腕組も忘れずに。

刹那、キミーツが笑った。

「フッ、やっぱり面白いな。クロトは」

先程まで悪魔の皮を被ったかのように不気味に笑っていた少女が、

今は打って変わったように天使のような明るい笑顔になっていた。

イキナリの豹変っぷりに驚かされ、思わず今度はこっちが目が点になる。

だが、本当に良い笑顔になっているのを見て、そのまま天使に見惚れていた。

「ってか、クロトって、なんで俺を知ってた？」

クロトと呼ばれて違和感がなかったことで突っ込みが遅れたが、一応突っ込んでおく。

時に悪魔であり天使のような容姿を持つキミーツは、へッ？、と間抜けな声を出した。

待てよ、と咄嗟にあるパターンが頭をよぎる。

「……私、クロトと同じクラスだけど？それにクロトの後ろの席」

やっぱりか。

初めっから、なんとなくだったが疑っていた。

そうじゃないか？、などと思っていたら本当にそうだったというオチが連発。

最早ここまでできたら清々しい気分だな。

でもな、こつも旨い具合に事が進むと気味が悪いとさえ思う。

もしか、こんなちんけな世界に、それも普通である（？）（この町に神様がいるとしたなら、迷わずハッキリと俺はこう言うだろう。

アンタは何をお考えで？、と。

そして、神様は言うに違いない。

クロトが望まない世界への変革、と。

これはただの俺の考えでしかない、妄想でしかない。

だがな、神様とはこういう存在なのかも知れない。

面白ければ良い、そんな神様もいるということだ。

なら、そんな神様に俺から一言だけ。

俺はアンタを許さない。

絶対、呪われるよな

俺。

第8話・再会（後書き）

やっぱり、書くのは面白いですね。

読むのもまた悪くないですが、これはこれで悪くない。
そう思いませんか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3442g/>

ある日の昼下がり

2011年1月16日02時26分発行